九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「荘老告退、山水方滋」考察 : 淝水の戦の文化史的意義

岡村, 繁
九州大学名誉教授, 久留米大学名誉教授 : 中国古典文学

https://doi.org/10.15017/9606

出版情報：中国文学論集. 32, pp.14-52, 2003-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

中国文学論集　第三十二号

「荘老告退、山水方滋」考

――淝水の戦の文化史的意義――

岡村　繁

はしがき

典午の南渡（三一七）以後、東晋中期の貴族文人社会では、老荘思想に基づく観念的超俗的な「玄言詩」が流行した。その具体的な作品は、後世の厳しい淘汰に堪えきれず現在ほとんど亡佚してしまったようだが、その詩風については、南斉末に撰述された劉勰（四六六？―五二〇？）の『文心雕龍』時序篇に「詩は必ず柱下（老子）の旨帰にして、賦は乃ち漆園（荘子）の義疏なり」と評せられ、梁の鍾嶸（四六八？―五一八）の『詩品』序にも「詩は皆平典（平板で類型的）にして、道徳論（道家の哲学論）に似たり」と言われる。恐らく当時の「玄言詩」は、遊仙詩・隠逸詩を含めて、おおむね老荘思想に心酔した没個性的で千篇一律な形而上詩であったのであろう。

ついで劉宋初期、この平典な「玄言詩」の後を承けて、以後の南朝貴族社会を風靡しはじめた新しい文化現象は、美贍で多彩な江南の山林丘壑を精細巧緻に詠出した「山水詩」の成立であった。劉勰の『文心雕龍』明詩篇に、「宋初の文詠は、体に因革（因襲・変革）有り。荘老退くを告げて、山水方に滋し」と称せられる所以である。まことに劉宋初期から興った「山水詩」は、豊麗富艶・精細的確にして洗錬巧緻をきわめ、正に六朝文芸の成熟期の到来を告げるにふさわしい潤雅巧麗な文学であった。

ところで、このように劉宋初期に至って華華しく「山水詩」が出現してきた原由については、私の見るところ、従来おおむね二つの方面――（一）客観的な江南の自然環境方面からと、（二）観念的な老荘思想・仏教思想方面

から――との理由づけが支配的であったように見受けられる。[1]

すなわち、その第一の理由づけは、すこぶる素朴な発想に因るものながら、北来士人にとって初めて接する江南の山水の新鮮で多彩な景観が、このように豊麗巧緻な「山水詩」の創作を強く促がしたのではないか、という見解である。しかしながら、かかる南北風土の対比は、この場合、果たして説得力を持ち得るものであろうか。思えば、中原の長安・洛陽と江南の建康・会稽とは、緯度にして僅かに五度の差に過ぎず、従って両地域の気候風土や山水の景観も基本的にはさほど決定的な隔差が認められない。かつて晋室南渡の直後、北来士人の周顗（二六九―三二二）が南北の風土寒暖を比較して、「風景（風の色・日の光）は殊ならず」云々と歎じた所以である（『世説新語』言語篇・『晋書』王導伝）。してみれば、北来士人が初めて接した江南の風土景観は、実際には、さほど「山水詩」成立の要因となっていなかったのではないか。また本格的な「山水詩」成立の時期から考えても、南渡後すでに一百年も経た劉宋初期というその時期は、あまりにも時期の上で間が抜け、遅きに失したように思われる。

その第二の理由づけは、前述した第一のそれとは比較にならないほど重要な問題を含んでいるようだが、劉宋初期の「山水詩」成立に当たっては、魏晋以来、貴顕の間で歓迎された老荘思想、とりわけ東晋中期以降の「玄言詩」が基盤としたその隠遁思想から極めて大きな影響を受けた、という見解であって、この視点は、私の見るかぎり現今の内外の研究において概ね支配的な傾向である。たしかに東晋の「玄言詩」とそれにつづく宋初の「山水詩」は、いずれも相前後する時代の貴顕文人による思索的所産である以上、両者が全く無関係であったはずはなく、むしろ濃密な連続関係にあったらしい事実を今更否定するつもりはない。

しかしながら、われわれが文学史の推移変遷を可能なかぎり十全に考察しようとする場合、老荘思想のみならず仏教思想をも含めて、このような観念的思想的方面からの探究だけで、果たしてその真実を遺憾なく見通すことができるのであろうか。なぜならば、当時の「山水詩」が、他の芸術作品と同様に、世評を意識した誇張や美化などその作者の持てるかぎりの演出能力を投入した文芸作品である以上、そこに詠みこまれた思想には、作者の信念・真情が率直に吐露される反面、時に虚栄的な美化や釈明の意識が付きまとう可能性があることも否定することができないからである。

このようなことを考えると、おおむね従来の内外の論考は、あまりにも高尚清雅な観念的思想的研究志向に深入りし過ぎてしまったのではないか。思うに、このまま従来の研究傾向が推移した場合、もともと富艶巧緻な文芸であったはずの「山水詩」が、やがて不知不識の間に内向的な思想詩に変質させられ、再びかつての「玄言詩」に引きもどされる、という滑稽な論理の自家撞着にも陥りかねない危惧さえ出て来そうに見える。

もしかすると、従来のわれわれの研究は、いかにも高尚で知性的な思想研究に眩惑されて、迂闊にも、当時の思想・文学が共に因って来たる巨大な時勢のうねりに目を向けることを怠っていたのではないか。本論文は、そうした従来の研究への反省の上に立って、ともかくも私なりに「山水詩」の成立事情を考察してみようとした一試論である。

一　西晋末から劉宋初期にかけての詩風の推移

晋朝過江前後から以後、江南の貴族文人社会の間で盛行した詩歌は、いったい具体的にどのような推移変貌をたどったのであろうか。その沿革については、幸いに南朝後半期、当時有数の著名な歴史学者や文学批評家によって書き残された生生しい記述の幾つかが現存している。今、まず参考までに、これを時代順に列挙すれば、おおむね以下のごとくである――

1．劉宋の檀道鸞『續晉陽秋』：

（前漢の）司馬相如・王褒・楊雄の諸賢より、世〻賦頌を尚び、皆　體（作風）は『詩』『騷』（『詩経』と『楚辞』）に則りて、百家の言を傍綜（網羅）す。建安（一九六―二一九）に至るに及びて、詩章（詩篇の創作）大いに盛んなり。西朝（西晋）の末に逮びて、潘（岳）・陸（機）の徒、時に質文（質朴な表現と華美な表現）有りと雖も、宗歸（理想とするところ）は異ならざるなり。

（魏の）正始（二四〇―二四八）中、王弼・何晏、『莊』・『老』の玄勝（超俗）の談を好みて、世は遂に焉（これ）を貴ぶ。江を過ぐる（南渡）に至って、佛理（仏教の教理）尤も盛んなり。故に郭璞の五言（「遊仙詩」）、始めて道家の言

を會合（聚合）して之を韻（詠）ず。（許）詢及び太原の孫綽、轉相た祖尚（継承）し、又加ふるに釋氏三世（仏教の過去・現在・未来）の辭を以てして、『詩』『騷』の體は盡きたり矣。詢・綽は並びに一時の文宗（当時の詩文の指導者）たれば、此れより作者は悉く之を體とす。（東晋末の）義熙（四〇五―四〇八）中に至りて、謝混始めて改む。（『世説新語』文学篇注・『文選』沈約「宋書謝靈運伝論」李善注、並引）

2．梁の沈約「『宋書』謝靈運傳の論」：

漢より魏に至るまで、四百餘年、辭人才子、文體（詩文の作風）三たび變ず。（司馬）相如は工みに形似（写実）の言を爲し、二班（班彪・班固）は情理（道理）の説に長じ、子建（曹植）・仲宣（王粲）は、氣質（個性）を以て體（作風）と爲し、並びに能（才能）を摽げ美を擅にして、獨り當時に映く。是を以て一世の士は、各〻相慕習す。其の飈流（風潮）の始まるところを原ぬるに、祖を『風』『騷』（『詩経』と『楚辞』）に同じうせざるは莫し。徒だ賞好（好み）情を異にするを以て、故に意製（創作）相詭ふのみ。

降りて（西晋の）元康（二九一―二九九）に及ぶや、潘（岳）・陸（機）特り秀で、律（リズム）は班（固）・賈（誼）に異なり、體（作風）は、曹（植）・王（粲）を變じ、縟旨（手のこんだ内容）は星のごとく稠く、繁文（飾りたてた表現）は綺のごとく合し、平臺（前漢、梁の孝王の文壇）の逸響を綴り、南皮（三国魏の建安文壇）の高韻を采り、遺風餘烈、事は江右（中原）に極まる。

晋の中興（東晋）に在りて、玄風は獨り扇んとなり、學を爲むるや柱下（老子）に窮まり、物を博むるや七篇（荘子）に止まり、文辭を馳騁するも、義（内容）は此に殫きたり。建武（三一七―三一八）より義熙（四〇五―四一八）に暨ぶまで、載を歴ること將に百ならんとし、響を比べ辭を聯ぬること、波のごとく屬き雲のごとく委なると雖も、言を（老子の）「上徳」（最上の徳）に寄せ、意を（荘子の）「玄珠」（無上の道）に託せざるは莫く、遒麗の辭、焉を聞く無きのみ。（殷）仲文は始めて孫（綽）・許（詢）の（玄言詩の）風を革め、（謝）叔源も大いに太元（東晋末、太元年間の老荘の学）の氣を變ず。

爰に宋氏に逮びて、顔（延之）・謝（靈運）は聲（名声）を騰ぐ。靈運の興會摽舉（興趣の卓抜さ）、延年の體裁明密（構成の詳密さ）は、並びに軌を前秀に方べ、範を後昆に垂る。

3．梁の劉勰『文心雕龍』明詩篇：

江左（東晋）の篇製は、玄風（道家の哲学的風潮）に溺れ、徇務の志を嗤笑して、忘機の談（超俗的な清談）を崇盛す。袁（宏）・孫（綽）以下、各〻雕采有りと雖も、辭趣は揆を一にして、與に雄を争うもの莫し。景純（郭璞）の仙篇（「遊仙詩」）、挺拔して俊と爲す所以なり。

宋初の文詠は、體（作風）に因革（因習と変革）有り。莊老退くを告げて、山水方に滋し。采を百字の偶に儷べ、價を一句の奇に争い、情（内容）は必ず貌を極めて以て物を寫し、辭（表現）は必ず力を窮めて新しきを追う。此れ近世の競う所なり。

4．梁の鍾嶸『詩品』序：

（西晋末の）永嘉（三〇七―三一三）の時、黄老（道家）を貴び、稍く虚談（高踏的哲学談義）を尚ぶ。時に篇什（詩歌）は、理（哲学的論理）其の辭（表現の文学性）に過ぎ、淡乎として味（風味）寡なし。爰に江左に及び、微波（老荘の風潮）は尚ほ傳はる。孫綽・許詢、桓（温）・庾（亮）の諸公、詩は皆平典（平板で類型的）にして、道德論（道家の哲学論）に似、建安（漢末魏初の建安文学）の風力（生命力）盡きたり。是より先、郭景純（郭璞）は雋上の才（卓越した詩才）を用って、其の體（作風）を創變（創造的に変革）し、劉越石（劉琨）は清剛の氣（清純剛毅な気力）に仗って、厥の美を賛成（助成）す。然れども彼は衆くして我は寡なく、未だ俗を動かすこと能はず。

（東晋末の）義熙（四〇五―四一八）中に逮び、謝益壽（謝混）斐然として繼ぎ作る。

（宋初の）元嘉（四二四―四五三）中、謝靈運（三八五―四三三）有り。才高く詞盛んにして、富豔蹤い難く、固より已に劉（琨）・郭（璞）を含跨（超越）し、潘（岳）・左（思）を凌轢（圧倒）す。

以上、これら六朝後期の歴史家や文学評論家たちの記述によれば、過江後、東晋一百年間にわたる貴族詩壇の大勢は、折しも貴族社会で花開いていた老荘的清談と相俟って、許詢（三一三？―三五二？）[2]・孫綽（三〇六―三六三）[3]をはじめ桓温（三一二―三七三）・庾亮（二八九―三四〇）等を中心に、ひとり「玄言詩」だけが盛行をきわめて、どの作品も恬淡として千篇一律、遒麗多彩な辞藻を見ることなく、あたかも老荘思想の要約・注釈のごとくであった。

しかしながら一方、このように「玄言詩」が一世を風靡していた東晋時代に在っても、なおかかる玄風に溺れることなく、この弊風を打破し変革しようとした卓見の詩人がなかったわけではない。すなわち、つとに過江前後には、文藻粲麗たる郭璞（二七六―三二四）と清純剛毅な劉琨（二七〇―三一七）という二人の逸材が出現して、かつての王粲・潘岳の清抜豊麗な藻翰への復帰変革を試みたが[4]、あまりにも時機尚早であったために、衆寡敵せず、残念ながら俗習を動かすことができなかった。ところが東晋末期の義熙（四〇五―四一八）年間に至って、謝混（？―四一二）・殷仲文（？―四〇七）という修辞文学の領袖が出現し、とりわけ謝安の孫にあたる謝混は、かつての郭璞・劉琨の詩風を復活継承すべく、華華しく貴族詩壇に登場して、あらためて当時の沈滞した作風の改革を始めた。かくて宋初の元嘉（四二四―四五三）年間、こうした東晋末期の詩壇の胎動を承けて、その詩風を飛躍的に発展せしめ、ついに「山水詩」という富艶多彩な大輪の花を咲かせた希世の詩宗が、ほかならぬ謝霊運（三八五―四三三）であった。

これを要するに、謝霊運は「山水詩」の本格的な開拓者であり、画期的な大詩人であった。この事実は、すでに清朝以後の詩豪・碩学たちの評価がこれを補強している。例えば、

a．王士禎『漁洋山人文略』巻二所収「雙江唱和集の序」：

漢魏の間の詩人の作は、亦た山水と了（つ）に相及ばず。元嘉の間に謝康樂の出づるに迨んで、始めて山水を刻畫（精細に描写）するの詞を創爲（創作）し、務めて幽を窮め渺を極め、山谷水泉の情狀を抉（えぐ）る。昔人云う所の「莊老退くを告げて、山水方に滋し」なる者なり。宋齊以下、率（おほむ）ね康樂を以て宗（宗主）と爲す。

b．沈德潛『説詩晬語』：

劉勰云う「莊老退くを告げて、山水方に滋し」と。山水に遊ぶの詩は、應（まさ）に康樂を以て開先（創始者）と爲すべきなり。

c．章炳麟『國故論衡』辨詩：

玄言の殺（おとろ）ふるや、語は田舍（農村）に及ぶ。田舍の隆んなるや、旁（あまね）く山川雲物（景物）に及ぶは、則ち謝靈運之（これ）の主と爲る。

等の所見がそれである。

ちなみに謝霊運は、東晋末期の最高の名族、陳郡の謝氏の嫡流として会稽に出生。晋の車騎将軍（第二品）謝玄（三四三―三八八）の愛孫。祖父の封爵を襲いで康楽県公となり、謝康楽と称せられた。元来彼は、会稽・呉興にわたる広大な荘園を有して豪奢な生活に明け暮れていたが、その生涯の大半は皮肉にも老荘の隠遁思想とは裏腹に、中央・地方の官界に浮沈すること長年月に及び、最後には反逆罪に問われて棄市の刑に処せられた。

一方、謝霊運の詩風については、梁の鍾嶸『詩品』巻上（上品）に、「宋、臨川太守の謝霊運の詩」と題して次のごとく言う――

其の源は陳思（魏の曹植）に出づ。雑ふるに景陽（西晋の張協）の體（作風）有り。故に巧似（形似）を尚ぶも、逸蕩（自由豁達）なること之に過ぎ、頗る繁蕪（繁雑）を以て纍と爲す。嶸謂へらく、「若き人は興多く才高くして、目に寓るれば輒ち書し、内に乏しき思ひ無く、外に遺せる物無し。其の繁富（豊富）なること宜なる哉。然れども名章迥句（名文秀句）は處處（至るところ）に間起し（代わる代わる現われ）、麗典（美麗にして典雅）なる新聲（新案の詩歌）は、絡繹として奔り會まる。譬へば猶ほ青松の灌木に拔きんで、白玉の塵沙に暎ずるがごとく、未だ其の高潔を貶しむるに足らず」と。

この評語によれば、謝霊運の詩風は、才学横溢、詞藻富艶、繁雑なまでに形似を追求し、努めて平凡素朴な表現を避けて新奇多彩な語彙を駆使した出色のものであった。

では、謝霊運の山水詩の実態は、果たしてどのようなものであったのだろうか。次節では、一応これを眺めてみることにしよう。

二　謝霊運の山水詩

そもそも謝霊運は、後世「山水詩」と称せられるにふさわしい本格的な叙景詩をいつごろから作りはじめたのであろうか。

今試みに謝霊運の現存詩集を通覧してみると、たしかに彼の山水描写の詩句は、若干ながら夙に東晋末期、安帝

の義熙年間の作に見出すことができる。すなわち義熙十四年（四一八）九月九日の重陽節、彼三十四歳の作「九日、宋公（劉裕）戲馬台の集いに従い、孔令（尚書令の孔靖）を送る」詩の冒頭に見える四句――

季秋邊朔苦　　季秋　辺朔苦しく、
旅雁違霜雪　　旅雁も霜雪を違く。
淒淒陽卉腓　　淒淒として陽卉腓み、
皎皎寒潭絜　　皎皎として寒潭潔し。（『文選』巻二〇）

がそれである。しかし、この程度の簡朴陳腐な叙景表現ならば、なにもこの謝霊運詩に特別な現象ではなく、彼以前の詩人にも習見するところであって、とりわけ建安の曹植・王粲、西晋の潘岳・張協・陸機、東晋の郭璞・謝混らの詩篇には、これ以上に巧麗多彩な自然描写に少なからず接することができる。

だとすれば、謝霊運が初めて明媚な山水に魅了されて本格的に「山水詩」を作り始めたのは、すでに小尾郊一『謝霊運――孤独の山水詩人――』（東京、汲古書院刊、一九八三年）後編「山水をうたう詩」にいみじくも指摘したように、劉宋王朝開国直後の永初三年（四二二）秋、彼三十八歳の作「始寧（今の浙江省上虞県）の墅に過る」詩を作った時と推定せざるを得ないであろう。小尾論文には言う――

彼（謝霊運）の詩に叙景が多くなされ、いわゆる山水詩と称せられるものが出現したのは、永嘉の太守に赴任する途中、故郷の始寧に立ち寄った時作った詩が始めてである。それは「始寧の墅に過ぎる」（『文選』巻二六）と名づくるもので、彼の三十八歳の時のものである。都から永嘉に出立する時作ったものに「永初三年七月十六日、郡に之かんとし、初めて都を発つ」及び「鄰里、方山に相送る」の詩があるが、これらには全く叙景は現われていない。（二八六―二八七頁）

ところで、この「始寧の墅に過ぎる」詩は、私が一見するかぎり、典故の用いかたが相当に複雑であり、従って詩句表現も意外に精巧なようであって、全篇かなり難解な印象を受けるが、とにかく一応読みくだしてみることにしよう――

束髪懷耿介　　束髪してより耿介を懐くも、

逐物遂推遷　物を逐ひて遂に推遷す。
違志似如昨　志に違ふこと昨の如きに似たるも、
二紀及茲年　二紀にして茲の年に及べり。
緇磷謝清曠　緇磷　清曠に謝(は)ぢ、
疲薾慙貞堅　疲薾　貞堅に慙づ。
拙疾相倚薄　拙疾　相倚薄し、
還得静者(6)便」　還って静者の便を得たり。」
剖竹守滄海　竹を剖きて滄海に守たり、
枉帆過舊山　帆を枉げて旧山に過(よぎ)れり。
山行窮登頓　山行しては登頓を窮め、
水渉盡洄沿　水渉しては洄沿を尽くす。
巖峭嶺稠疊　巖は峭(けは)しく嶺は稠畳、
洲縈渚連緜　洲は縈(めぐ)りて渚は連綿。
白雲抱幽石　白雲は幽石を抱き、
緑篠媚清漣　緑篠は清漣に媚ぶ。
葺宇臨迴江　宇を葺きて迴江に臨み、
築觀基曾巔」　観を築きて曽巔に基づく。」
揮手告鄉曲　手を揮ひて郷曲に告ぐ、
三載期歸旋　三載にして帰旋を期す。
且爲樹枌檟　且く為に枌檟を樹ゑ、
無令孤願言」　願言に孤(そむ)かしむるなかれと。」

「髪をつかねた幼少の時から堅く反骨の節操を心掛けてきたが、ついつい俗っぽい仕官の道を追いかけるように

なり、かくてそのまま歳月が推移してしまった。素志に背いたのはほんの昨日のように思われるのに、早くも二十余年の歳月が過ぎて、ついに今年とはなってしまった。今や私は、世俗にまみれて晴朗さを失ない、仕途に疲れ果てて貞固さも無くなった。だが、宮仕えの拙劣さとわが身の多病とが重なり合ったお蔭で、却って故郷に帰れる絶好の機会を得た。

かくて私は、郡の太守に任ぜられて南のかた東海の永嘉郡（今の浙江省温州市一帯）に赴くことになったが、その途次、舟路を遠回りして故郷の始寧の旧居に立ち寄ったわけだ。その間、山を巡っては峰や谷をくまなく登り降り、川をわたっては上流も下流も見尽くした。巨大な岩は鋭くそそり立ち、高い峰がびっしりと重なっており、また川の中洲は長々とめぐり、波打ち際がはるかにつづいている。峰に涌く白雲は深山の石を抱くがごとく、岸辺の緑竹は清らかなさざ波に美しく映じている。そして私の別荘は、入りこんだ江流を眼下にして屋宇をかまえ、高い山頂を土台にして高い建物を築いている。

やがて手を振って別れる際には、この故郷の人々に告げた――『任期の三か年が終ったら必ずここへ帰ってくるぞ。まあともかく私のために棺桶用のにれやひさぎでも植えておいて、私の願望を裏切らせないようにしてくれ』と。」

もしかすると謝霊運は、仕官以来ほぼ二十年ぶりに始めて故郷の荘園に帰来して、あらためてその明媚多彩な山水に魅了され、はからずもこの山水美を詩作に再現する契機をつかんで、その興感を起こしたのではなかったか。

そこで今度は多少観点を変えて、謝霊運の現存詩篇中、山水描写の比率が最も多い作品を挙げてみることにしよう。前述の小尾論文[7]に拠れば、それは「南山より北山に往かんとし、湖中を経て瞻眺す」詩（『文選』巻二二）であって、全篇二十二句中、叙景部分が実にその八割を占めている。その詩に言う――

朝旦發陽崖　　朝旦に陽崖（南山）を発し、
景落憩陰峯　　景（ひ）落ちて陰峯（北山）に憩ふ。
舍舟眺迴渚　　舟を舎てて迴（はる）かなる渚を眺め、
停策倚茂松　　策（つえ）を停めて茂れる松に倚る。
側逕既窈窕　　側逕は既に窈窕たり、

環洲亦玲瓏　環洲は亦た玲瓏たり。
俛視喬木杪　俛して喬木の杪を視、
仰聆大壑灅　仰いで大壑の灅（合流）を聆く。
石横水分流　石横たわりて水は流れを分ち、
林密蹊絶蹤　林密くして蹊は蹤を絶つ。
解作竟何感　解作（造化の営み）　竟に何をか感かす
升長皆圭容　升長　皆　豊容たり。
初篁苞緑籜　初篁は緑籜に苞まれ、
新蒲含紫葺　新蒲は紫葺を含む。
海鷗戲春岸　海鷗は春岸に戲れ、
天雞弄和風」　天雞は和風に弄る。」
撫化心無厭　化に撫ひて　心　厭くなく、
覽物眷彌重　物を覧て　眷しみ弥〻重なる。
不惜去人遠　去人（古人）の遠きを惜しまず、
但恨莫與同　但だ与同にする莫きを恨む。
孤遊非情歎　孤遊は情の歎くところに非ず、
賞廢理誰通　賞廃れなば　理　誰か通ぜん。」

一読して明らかなように、この詩は、前述の「始寧の墅に過る」詩の場合とは若干相異なり、前置きの形式的な導入部分を一切省略して、いきなり山水景物の描写から始まり、この景象描写がそのまま全篇の主要部位を占めている――

「夜明けのころ南山を出発して、日が沈むころ北山に到着して身を休めたが、その水行途上、巫湖では、時に舟を捨てて遥かにつづく中洲を眺めたり、時に杖を停めて茂った老松に身を寄せかけたりもした。山沿いの小道はうね

うねと長くつづいていただけではなく、曲線を描く波うちぎわも清らかに透き通っていた。また山上では俯して高い大樹の梢を見下し、山峡では仰いで深い谷間に合流する水の響きに耳を傾けた。石が横たわって川が流れを分けていたり、林がびっしり茂って山道がどこだか分からなくなっていたりもした。そもそも天地の凍結が解けて雷雨が作こり草木が蘇生する造化の営みは、いったい何を感動させるのだろうか。とにかく生長する草木は一つ残らず生命力に満ち溢れて生い茂っている。生え出たばかりの竹の子は緑の皮につつまれ、新しい蒲の茎先には既に紫色の穂を含んでいる。波間の鷗は春のおだやかな岸辺にたわむれ、錦鶏はなごやかな春風を楽しんでいる。

天地の移ろいに身を委ねておれば心は満ち足りて飽きることなく、自然の景物を眺めていると愛着もますます深くなるものだ。今更この造化の営みを知る古人が遥かな昔にいなくなったことぐらいは口惜しく思わないが、しかし古人と共にこの自然観賞ができないのは残念だ。さらに言えば、このような自分一人の孤独な遊楽ぐらいは深く嘆くに当たらないが、もしこの自然観賞が絶えてしまったら、この理念は、いったい誰が理解できると言うのだ。」

今、自分が、この明媚多彩な山水を賞美し、これをそのまま詩文に留めておかなければ、いったい自然観賞の理念はどうなってゆくのか――。このような謝霊運の山水美に対する悲しいまでの執念さえ、われわれはひしひしと感じ取ることができる。

さらに念のために、謝詩中、前出の詩篇に次いで山水描写が多きを占める作品を挙ぐれば、「斤竹澗より嶺を越えて渓行す」詩（『文選』巻二二）に以下のごとく言う――

猨鳴誠知曙　猨鳴きて誠に曙を知れども、
谷幽光未顯　谷幽くして光未だ顕らかならず。
巖下雲方合　巖下　雲は方に合まり、
花上露猶泫　花上　露は猶ほ泫る。
逶迤傍隈隩　逶迤として隈隩に傍ひ、
苕遞陟陘峴　苕遞として陘峴を陟る。
過澗既厲急　澗を過ぎては既に厲ること急しく、

登棧亦陵緬　棧を登りては亦た陵ゆること緬かなり。
川渚屢逕復　川渚　屢〻逕復し、
乘流翫迴轉　流れに乗りて迴轉を翫しむ。
蘋萍泛沈深　蘋萍は沈深に泛び、
菰蒲冒清淺　菰蒲は清浅を冒ふ。
企石挹飛泉　石に企ちて飛泉を挹み、
攀林摘葉卷」　林を攀きて葉卷を摘む。」
想見山阿人　想見す　山阿の人、
薜蘿若在眼　薜蘿　眼に在るが若し。
握蘭勤徒結　蘭を握るも　勤ひ　徒に結び、
折麻心莫展　麻を折るも　心　展ぶる莫し。
情用賞爲美　情は賞を用て美と為すも、
事昧竟誰辨　事は昧くして竟に誰か弁ぜん。
觀此遺物慮　此れを観て物慮を遺れ、
一悟得所遣」　一たび悟りて遣る所を得たり。」

この詩も、やはり序言部分を省略して、いきなり山水景物の描写から始まり、全篇二二句中、その記遊・写景部分が六割強の一四句を占めている――

「猿の鳴き声を聞いて、たしかに夜明けを感じ取ったが、谷が深いので日の光りはまだ分明ではない。とはいえ、そそり立つ巨巖の下には朝雲がやっと集まりはじめ、美しい野花の上には朝露がなおも滴り落ちている。私は、うねうねと曲がりくねった山路や川岸をたどり、はるばるとつづく山坂や小高い峰を登ってゆく。谷川を越えるときには大急ぎで徒ちわたったばかりか、さらには懸橋を登るときにも遥かな路を越えて行った。[8] 川の水際は至るところで曲がりくねり、流れに従ってその回航を満喫した。見れば、かずかずの浮草が深い淵泉にただよい、さまざま

な水草が澄んだ浅瀬を覆っている。そこで、時には石の上で伸び上がって滝の水を汲んだり、時には林の木に手を差し伸べて若芽を摘んだりもした。

かくて山蔭に住みなす隠者がありありと想像されてきて、その隠者が着るつたかずらの服が、あたかも眼前に現われるように思われる。しかし現実は、香り高い蘭を採っても憂愁は空しく胸をふさぐばかりであり、また疏麻（神麻）の美しい芳花を手折ってもわが心は晴れる時とてない。心情では自然観賞を素晴らしいことと思うけれども、その実践内容は分かりにくいので、いったい誰がこれを解明できよう。とにかく私は、この美しい山水を眺めているうちに俗世間の憂いなど忘れ去り、ぱっと悟りが開けて無心の境地に達することができた。」

この詩に所謂「賞」は、小尾論文によれば、自然観賞の意に近いようであり、さらに的確に言えば、世俗を超越して山水自然と物我一体となった隠遁的境地を意味する[9]。思うに、謝霊運のこの自然観賞の境地は、もちろん元来は老荘思想・仏教思想に導かれた彼の理想的生活心境であったとはいえ、所詮は貴族的な遊楽の範疇に属する消閑的理念に過ぎない。が、この詩によるかぎり、当の謝霊運にとっては、かけがえのない、悲壮な使命感にも似た「悟り」の境地であったらしい。

これを要するに、謝霊運の現存詩篇中、その山水詩の成立事情を考察する上で特に注目される作品三篇を例示したが、この三篇は、必然的にか偶然にか、いずれも始寧の荘園において作った雄篇であることが注目される。のみならず、彼がこの別墅において山水を詠じ込んだ詩篇は、右記三篇以外にも、例えば「田南に園を樹き、流れを激み援を植う」詩（『文選』巻三〇）・「石門に新たに住する所を營む。四面には高山・廻渓・石瀨・脩竹・茂林あり」詩（同上）・「石壁の精舎より湖中に還るの作」（『文選』巻二二）・「南楼の中、遅つ所の客を望む」（『文選』巻三〇）・「石門の最高頂に登る」詩（『文選』巻二二）等、少なからずこれを見ることができる。

ところで、このような謝霊運の山水詩の制作傾向から総合的に推察すると、われわれが彼の山水詩の成立事情を考察しようとする場合、一応ながら謝霊運が本格的に山水詩を作りはじめた時期については、前述のごとく劉宋王朝建国初頭の武帝永初三年（四二二）ごろと想定し、また謝霊運を終始最も強力に山水詩の創作に駆り立てた環境については、これを一律に彼の山水詩全般から考えるのではなく、特に始寧の広大な荘園に作詩の焦点を絞ってこ

れを想定してみては如何であろうか。思うに、このような一応の想定も、あながち無暴な予測ではないであろう。

では、なぜ山水詩は、東晋の中末期ではなく、ようやく劉宋初頭に至って、始めて勃然として謝霊運という超一流の貴族文人によって本格的に作られはじめたのか。また東晋中期の玄言詩の全盛時代と劉宋初頭の山水詩の勃興期との間には、なにか当時の文運を左右するほどの決定的大事件でも介入してきたのか。

次章では、その歴史的・社会的な変動の必然性を私なりに究明してみることにしよう。

三　淝水の戦と新興軍事政権の擡頭

1．淝水の戦の経緯

東晋一百年も既にその三分の二を経過した終末期、孝武帝の太元八年（三八三）、北朝の前秦王苻堅は無慮百万の大軍を率いて南下し、ついに東晋の東北境域に入寇してきた。かくて戦機が熟して、その前秦軍と、これを迎え撃つ東晋軍とは、いよいよ寿春・淮南一帯で激突することとなった。この会戦を世に「淝水の戦」という。思うに、この大会戦は、正に東晋王朝の命運を賭けた建国以来の一大国難であった。

ところが意外なことに、この淝水の戦の具体的経緯については、私の見るかぎり、その顚末を一貫して系統的に追跡した記録ないし解説は、古来ほとんど出現していないように見受けられる。もちろん古い史書には、北宋の司馬光（一〇一九―一〇八六）『資治通鑑』巻一百五（晋紀・孝武帝太元八年）の条が存在するが、これとても極言すれば総じて正史からの断片的な逸話の寄せ集めに過ぎない。また一方、近来の史学者による論著に目を転じても、管見の及ぶところ、その傾向はおおむね同様であるが、わずかに呂思勉『両晋南北朝史』（一九四八年、上海開明書店刊）の第六章「東晋中葉形勢下」に見える解説は、主として『晋書』載記（苻堅下）に拠りながらも、際立って戦局の推移に忠実であり、かつその論述も要領を得ているように思われる。以下、参考までに煩をいとわずこれを抄録しておこう――

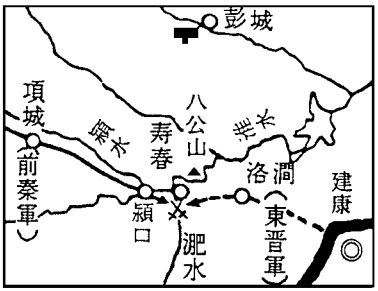
太元八年（三八三）、苻堅は、大擧入寇す。堅、先づ苻朗（堅の従兄子）をして青州を守らしむ。又裴元略を以

て西夷校尉、巴西・梓潼二郡の大守と爲し、王撫と舟師を蜀に備へしむ。已に又書を下して、悉く諸州の公私の馬を發（徵発）せしめ、人は十丁（壮丁）に一を遣（提出）せしむ。兵の門（門地）の灼然（九品中正の第二品）に在る者は、崇文義從（崇文観の外人属官）と爲し、良家の子の年二十已下、武藝驍勇、富室材雄なる者は、皆羽林郎（禁軍の侍従）と爲す。苻融（堅の末弟）・張蚝・苻方・梁成・慕容暐・慕容垂を遣はして歩騎二十五萬を率ゐしめて前鋒と爲す。堅、長安を發し、戎卒六十余萬、騎二十七萬なり。前後千里、旌鼓相望む。堅の項城（河南省項城県）に至るとき、涼州（甘粛省）の兵、始めて咸陽に達す。蜀・漢の軍、流れに順ひて下り、幽・冀の衆、彭城（江蘇省徐州市）に至る。東西萬里、水陸齊進す。

（苻）融等、攻めて壽春（江蘇省寿県）を陷る。（慕容）垂、攻めて項城を陷る。梁成、其の梁州刺史王顯・戈陽太守王詠等と、衆五萬を率ゐて、洛澗（安徽省懐遠県）に屯し、淮（水）に柵して以て東軍（東晋軍）を遏む。晉、謝石（謝安の弟）を以て征討都督（総大将）と爲し、謝玄（謝安の甥）・桓伊・謝琰（謝安の子）等と、水陸七萬、相繼いで（苻）融を距ぐ。洛澗を去ること二十五里。龍驤將軍胡彬、先づ硤石（安徽省鳳台県）を保ち、融の逼る所と爲り、糧盡き、潛かに使を遣はして（謝）石等に告げて曰く、「今、賊盛んにして糧盡く。恐らくは復た大將軍に見えじ」と。（苻）融の軍人、獲て之を送る。融、乃ち使を馳せて（苻）堅に白して曰く、「賊少く俘にし易し。但だ其の越逸（逃亡）を懼る。宜しく速やかに衆軍を進めて、賊帥を犄禽（逮捕）すべし」と。堅、大いに悅び、大軍を項城に舍ち、輕騎八千を以て、道を兼ねて（二倍の速度で）之に赴く。軍人に令して曰く、「敢へて吾れ壽春に至ると言ふ者は、舌を拔かん」と。故に（謝）石等知らず。

劉牢之、勁卒五千を率ゐて、夜　梁成の壘を襲ひて、之に克ち、（梁）成及び王顯・王詠等の十將を斬り、士卒の死する者は萬五千。

謝石等、既に梁成を敗りしを以て、水陸繼ぎ進む。（苻）堅、苻融と城に登りて王師を望み、部陣齊整、將士精鋭なるを見る。……憮然として懼るる色



淝水戦要図

有り。

堅、朱序を遣して（謝）石等に説かしむるに衆盛（軍勢衆多、気勢盛大）なるを以てし、脅して之を降さんと欲す。（朱）序、（謝）石に謂ひて曰く、「若し秦の百萬の衆皆至らば、則ち敵す可き莫きなり。其の衆軍の未だ集らざるに及びて、宜しく速戦に在るべし。若し其の前鋒を挫かば、以て志を得べし」と。（謝）石、（苻）堅の壽春に在るを聞くや、懼れて戦はずして以て之を疲れしめんことを謀る。謝琰、（朱）序の言に従はんことを勸め、使を遣して戦はんことを請ひ、之を許す。

時に張蚝、謝石を淝南に敗り、謝玄・謝琰、卒數萬を勒（統率）して、陣して以て之を待つ。蚝、乃ち退く。堅、陣を列ねて淝水に逼り、王師は渡るを得ず。（謝）玄は使を遣して（苻）融に謂ひて曰く、「君の懸軍（深く敵地に入った孤軍）は深く入りて、陣を置き水に逼る。此れは持久の計にして、豈に戦はんと欲する者ならんや。若し小（すこ）しく師を退けて、將士をして周旋（交際）せしむれば、僕と君公とは轡（たづな）を緩めて之を觀ん。亦た美（よ）からずや」と。（苻）堅の衆は皆曰く、「宜しく淝水に阻み、上るを得しむること莫かるべし。我は衆く彼は寡く、勢必ず萬全なり」と。堅曰く、「但だ軍を卻けて過ぐるを得しむるも、我は鐵騎數十萬を以て、水に向かひて逼りて之を殺さん」と。（苻）融も亦た以て然りと爲す。遂に麾（指揮）して陣を卻かしむ。衆因りて亂れ、止むること能はず。（謝）玄は（謝）琰・（桓）伊等と、精鋭八千を以て、淝水を渉渡す。（謝）石の軍は張蚝を距（ふせ）ぎて、小しく退く。（謝）琰・（謝）玄は仍ほ進む。淝水の南に決戦す。堅は流矢に中る。陣に臨みて（苻）融を斬る。堅の衆は奔潰す。自ら相蹈藉し、水に投じて死する者、勝げて計ふべからず、淝水は之が爲に流れず。餘衆も甲を棄てて宵に遁れ、風聲鶴唳を聞きて、皆以爲（おも）へらく王師已に至ると。草行露宿、重ぬるに飢凍を以てし、死者は十に七八なり。堅は淮北に遁歸す。時に十月なり。（二三〇―二三二頁）

これを要するに、淝水の戦は、結局わずか兵八万に過ぎなかった東晋軍が、これに十倍する前秦の大軍を完膚なきまでに打ち破り、奇跡的な圧勝を贏ち得たわけだが、この東晋軍の圧倒的大勝は、果たしてどのような原由によるのであろうか。思うに、それは、すでに自明の事実ながら、決して当時の一流貴族を主体とした東晋軍の最高統帥部の絶妙な作戦に由るものではなく、むしろ前秦王苻堅自身らの衆を恃んだ自己過信による戦局の読み違え、な

いし作戦の失敗に起因している。また一方、これを東晋側から見た場合、柔弱無能な貴族領袖の下に従属しながらも、よく力戦奮闘、衆敵を撃破した劉牢之をはじめ、兵馬精強、軍律厳正な北府軍団の存在は、陰に陽に戦局を有利に導く誘因となったらしい。この事象も、この際むげに看過するわけには行かないであろう。

2．謝氏一族の無能無策と優柔虚栄

この前秦王苻堅の大挙入寇に際して、東晋政府の最高首脳部は、ほとんど陳郡の謝氏一族が独占していた。言うまでもなく謝氏は、当時すでに琅邪の王氏に替わって東晋随一の貴族に伸し上がっていたのである。そして特に謝安（三二〇―三八五）は、当時の司徒（宰相）であり、兼ねて征討大都督として全将帥を指揮統轄する最高司令官の重責にも在ったし、その弟の謝石（三二七―三八八）は、仮節征討大都督（現地派遣軍総司令官）、兄の子の謝玄（三四三―三八八）は、冠軍将軍（北府軍団長）であり、かつ苻堅迎撃の前鋒都督（先鋒部隊長）となり、前述の勇将劉牢之はその参軍（参謀）であった。しかしながら、謝安以下これら謝氏の重鎮たちの態度には、当時未曽有の国家的危機に直面していたにもかかわらず、その無能さと無責任さ、その優柔不断さと虚栄ぶりが、正に臆面もなくさらけ出されている。以下、謝安の態度を中心に幾許か顕著な事例を呈示してみよう。

a．『晋書』謝安伝に言う：

時に苻堅は強盛にして、疆場（国境地域）に虞（外寇）多く、諸將の敗退相繼ぐ。（謝）安、弟の石及び兄の子の玄等を遣はして、機に應じて征討せしめ、所在（至る所）に克捷す。……堅、後に衆を率ゐ、百萬と號して、淮・淝に次（宿営）すれば、京師震恐す。安に征討大都督を加ふ。（謝）玄入りて計を問ふも、安は夷然（平然）として懼るる色無く、答へて曰く、「已に別に旨（指示）有らん」と。既にして寂然たり。玄は敢へて復言（再説）せず。乃ち張玄をして重ねて請はしむ。安、遂に駕に命じて山墅（山中の別荘）に出づ。親朋畢く集まる。方に玄と棊を圍みて別墅を賭く。安、常に棊は玄より劣れり。是の日は玄懼れて、便ち敵手と爲るも又勝たず。安、顧みて其の甥の羊曇に謂ひて曰く、「墅を以て汝に乞へん」と。安、遂に游渉（散歩）して、夜に至りて乃ち還り、將帥に指授して、各〻其の任に當らしむ。

「荘老告退、山水方滋」考

思うに、戦局が急を告げた場合、司令官の的確で機敏な対応は、絶対的な勝利の要諦である。ところが右記の謝安の場合、征討大都督であった謝安は、前鋒都督の謝玄の質問に対して、あらぬことか悠然と「やがて別途に指示は出すはずだから」と言って、意識的に当面の問題をはぐらかし、即答を避けている。たしかに謝安のこの際の「旨」（指示）は、結局その日の深夜以降になって遅れ馳せながら直接前線の「将帥」に伝達されたらしいけれども、一刻を争う緊迫した戦局に対応する最高司令官の指令としては、なんと無責任な、間延びのした非現実的対応であったことか。

また一方、謝玄にしても、前線部隊長という当面の戦局に直接対応できる絶好の地位に在りながら、その職責も果たさず、おめおめと首都建康まで長途東上して、さほど戦場の実態に精通してもいないはずの謝安に、わざわざその対応計策を問いに行っているが、この謝玄の言動は、いかにも頼りなく不見識であり、狡猾な責任逃れの誹謗さえ免れないであろう。

b．また『世説新語』尤悔篇注に引く劉宋の檀道鸞『続晋陽秋』に言う：

（桓沖）苻堅の自ら淮・淝に出でたることを聞きて、深く根本[10]（京師）を以て慮（憂慮の対象）と爲し、其の隨身（近習）の精兵三千人を遣して京師に赴かしむ。時に（謝）安は、已に諸軍を遣し、且つ外（表面上）は間暇（平穏無事）を示さんと欲し、因って（桓）沖の軍をして還さしむ。沖は大いに驚きて曰く、「謝安は乃ち廟堂の量（宰相の器量）有れども、將略（軍事上の謀略）に閑はず。吾は量るに、賊は必ず襄陽を破りて、力を淮・淝に并めんと。今、大敵果たして至るに、方に遊談して暇を示し、諸〻の事を經ざる年少（経験のない若僧ども）を遣し、而も實に寡弱（兵力弱小）なり。天下誰か知らん。吾れ其れ左衽せん矣[11]」と。

ちなみに、桓沖（三二八―三八四）は、西府軍団の総帥桓温（三一二―三七三）の弟。当時、荊州刺史として桓温没後の西府を統轄し、苻堅に備えてその防衛に力をそそいでいた。なお、この桓沖が西府の精鋭三千を首都防衛に差遣した時、すぐさま謝安が示した意外な反応については、『晋書』桓彝伝に附した桓沖伝が更に具体的にこれを報じている。曰く：

謝安は謂へらく、「三千人、以て損益（増減）と爲すに足らず」と。而も外に閑暇を示さんと欲し、（桓沖派遣の）

軍近くに在りと聞くも、固く聴さず。報じて云ふ、「朝廷の處分（処置）已に定まり、兵革（軍備）闕くこと無し。西藩（西府）は宜しく以て防を爲すべし」と。

もって読者の状況把握を、より容易にすることができるであろう。

思うに、この時の謝安の対応は、多分に西府勢力の首都進出に対する警戒的措置ではあったであろうが、それにしても謝安の日常生活は、特に桓沖のような武人の目から見た場合、直面する国家の危難に対して的確敏速な措置を怠り、ただ表面だけの平穏無事を見せかけ、日夜貴族的な遊談に明け暮れて、正に無能無策と優柔虚栄の極みであった。「今に拙者は、襟を左前にした野蛮な服装にさせられて異民族の奴隷になってしまうぞ」――この桓沖の言葉は、正に無能で無責任な謝安に対する痛烈な批判であり、軽蔑・罵倒である。

C．さらに『晉書』謝安伝に言う：

（謝）玄等、既に（苻）堅を破り、驛書（駅伝の速達文書）の至る有り。（謝）安、方に客に対して棊を圍む。書を看ること既に竟りて、便ち摂めて牀上に放（放置）し、了に喜色無く、棊すること故の如し。客、之を問へば、徐に答へて云ふ、「小兒輩（小わっぱども）、遂に已に賊を破れり」と。既に罷めて内に還り、戸限（家の門口）を過ぐるや、心喜び甚だしくして、屐齒（下駄の歯）の折れたるを覺えず。其の情を矯め物を慎むること此の如し。

ちなみに、この有名な挿話の前段部分――謝安が客と囲碁中、たまたま淝水での捷報を知っても敢えて平常と異なる様子がなかった場面は、つとに南朝宋の劉義慶『世説新語』雅量篇に採録されている。また『晉書』の文に所謂「矯情」（情を矯む）とは、ことさらに自分の真情を隠して外見を飾ることを謂う。当時における貴族の「雅量」（おっとりした気質）は、まぎれもなく「虚栄」の別称であった。

以上の諸例からも窺われるように、謝氏一族、特に当時その領袖であった謝安の場合、未曽有の国難に率先対処すべき宰相・征討大都督の重責に在りながら、なお時局の実態を直視しようともせず、空しく見栄を張るばかりで、日夜遊楽と遊談に明け暮れていたらしい。そして、一族の領導がこのような体たらくであった以上、謝氏一族の不見識・無責任ぶりは推して知るべきであろう。当時における謝氏一族の放逸懶慢な生活態度は、多分に王導以来の

強固な貴族専擅の政治体制の上に胡座（あぐら）をかいていた感がある。

しかしながら、この絶対的とさえ見えた謝氏中心の貴族制社会も、そうそう長くはつづかなかった。いかに当時は貴族専制の時代であったとはいえ、この淝水の戦を契機として、貴族たちの無能無策・虚栄欺瞞の本質は、百戦錬磨の将帥たちによって容易に見透かされて、果てはその不信と軽蔑を招くことにもなってきたからである。

3．東晋末期における新興軍権の擡頭

東晋中末期、陳郡の謝氏を頂点とする高級貴族が、無能無策、文弱の極に在ったのとは対照的に、淝水の戦を契機として、急速に軍事的な自信をつけ、以後に続発する動乱の中で、いつの間にか隠然たる権勢を蓄えてきたのは、奮戦力闘、実質的に東晋の命運を左右した北府・西府の将帥たちであった。なかんずく北府軍団の猛将劉牢之と、これを承けた劉裕の擡頭は、まことに目を見張るものがあった。

劉牢之（？―四〇二）、字は道堅。彭城（江蘇省徐州市）の人。曽祖羲以来の武門に生まれ、累世勇壮をもって称せられた。牢之は、沈着剛毅にして計略に富み、東晋末の孝武帝の太元初年（三七六）ごろ、前秦の苻堅の入寇に備えた北府の謝玄の募兵に応じてその幕下に入り、その参軍となった後、精兵を領して前鋒（監軍）となり、百戦百勝、大いに敵兵を畏れさせたばかりか、やがて苻堅が入寇するや、精兵五千を帥いて賊の士卒一万五千人を殺すなど、淝水の戦をはじめ各地で勝利を収めて、北府軍団の勇名をとどろかせた。その後、北府の長官となって来任した貴族の王恭（？―三九八）は、劉牢之をその府司馬（北府の高級幕僚）とし、やがて王恭の死後、恭に代って一躍都督（地方軍政長官）に栄進し、ついに北府軍団をその支配下に収めた。

そして安帝の隆安三年（三九九）、孫恩の乱が会稽で勃発すると、牢之は衆を率いて東討し、しばしば賊を撃破して殺傷するところ甚だ多く、特に進めて前将軍・都督呉郡諸軍事に拝せられ、さらにその後、功によって鎮北将軍・都督会稽五郡を加えられた。時に、牢之の参軍劉裕の活躍は特に目覚ましく、例えば隆安五年（四〇一）、孫恩が戦士十万・楼船千余をもって京口（江蘇省鎮江市）を急襲してきた時、劉裕は手兵わずか千人足らずで賊と戦ってこれを破ったほどであった。

しかし劉牢之は、根っからの武人であったためか、その晩年には、建康政府の司馬道子・司馬元顕父子と西府の桓玄との抗争など、東晋末期の政争に捲き込まれて、結局自ら縊死し、桓玄はその棺を斲り首を斬って、尸を市に暴した。（『晋書』劉牢之伝）

この劉牢之の後を承けて北府軍団の実権を掌握し、その強大な軍事力を背景として、幾たびか勃発した東晋王朝末期の動乱を鎮圧し、ついに東晋王朝に代って劉宋王朝の初代皇帝にまで伸し上がってきたのは、寒門出身の風雲児劉裕であった。

劉裕（三五六―四二二）、字は徳輿。劉牢之と同じく彭城（江蘇省徐州市）の人。曽祖父劉混以来の居住地であった晋陵郡丹徒県の京口里（江蘇省鎮江市）に生まれ、長ずるに及んで、身長七尺六寸（一八三・五センチ）、風容は衆に抜きんでていた。家は貧賤であったが、大志を抱いて品行にはこだわらなかったという。初め前将軍劉牢之の下でその参軍となり、孫恩の乱では水陸にわたって大功を重ねて、安帝の隆安五年（四〇一）八月、建武将軍（四品）・下邳太守となった。

ついで元興元年（四〇二）正月、建康政府の司馬元顕と西府の桓玄との戦いが始まり、桓玄は荊楚の大軍を率いて元顕を討ち、首都建康を陥れて元顕を殺した時、北府の劉牢之はその甥の何無忌と参軍の劉裕の諫言も聴かずに桓玄に降ったために、劉裕もやむなく桓玄に従っていたが、元興二年（四〇三）十二月、桓玄が東晋の帝位を簒奪して楚帝を称するや、劉裕は弟の劉道規・沛郡の劉毅や前述の何無忌ら九人の北府の将帥と共謀して京口と広陵等で義兵を挙げることとなり、同三年（四〇四）二月、このクーデターは見事に成功して、桓玄は殺され、安帝は復位した。かくて劉裕は、この大功によって使持節・都督揚・徐・兗・予・青・冀・幽・并八州諸軍事（二品）となり、名実共に北府軍団の総司令官となった。

その後も、晩年の劉裕には終に寧日はなかった。思うに、歴史的な大転換期には、実に多種多様な大小の動乱が頻発するものだが、この東晋終末期の僅々十数年間に、劉裕が直接対処した内外の大事件は、その主要なものだけでも概ね以下のごとくである。

まず国内の動乱としては、桓玄を誅滅した直後の元興三年（四〇四）冬十月から義熙七年（四一一）夏四月まで前

後七年有余の長きにわたった盧循の乱がある。この動乱は、前述した孫恩の乱の残党数千人が、孫恩の妹の夫盧循を擁して、福建から広東に南下、広東一帯を根拠地として、ついには首都建康にまで攻め上ってきた道教系宗教集団の反乱である。

また、この盧循の乱とほぼ併行して、義熙元年（四〇五）二月から同九年（四一三）秋七月までの前後八年余り、西のかた巴蜀の地では譙縦の乱が起こっている。この反乱は、当時安西府参軍であった譙縦（？―四一三）が安西将軍・益州刺史の毛璩を殺害し、蜀に拠って叛いて自ら成都王を称した反乱である。

さらには、義熙八年（四一二）九月、かねてから劉裕に反抗していた劉藩・謝混および劉毅を殺害。

以上、大小動乱の鎮圧は、いずれの場合も北府軍団を率いる劉裕にとって極めて重要な討伐であり、処置であった。

また一方、山東の南燕国と中原の後秦国に対する北伐は、上述した国内諸反乱の鎮圧より以上に、当時の劉裕にとって更に重大な意義を持つものであったように思われる。

まず山東の南燕国に対する北伐は、桓玄が誅に伏した数年後、鮮卑族（モンゴル族）の南燕第二代の天子慕容超が前後しばしば東晋北境に侵寇してきたため、ついに義熙五年（四〇九）四月から翌六年（四一〇）春二月まで約一か年にわたって敢行された。かくて劉裕の率いる北討軍は、山東出兵以来各地で大いに敵を破り、六年二月にはその首都広固（山東省益都県北東）を陥れて慕容超を捕獲し、その王公以下を殺し、衆庶一万余・馬匹二千を収納し、超を京師建康に送ってこれを市で斬刑に処し、南燕を滅した。南燕二主十三年。

また中原の羌族（チベット族）後秦国に対する北伐は、盧循の反乱や譙縦の反乱など国内の大小の動乱が一応片付いた数年後、義熙十二年（四一六）秋八月から翌十三年（四一七）閏十二月まで約一年半にわたった征討であって、劉裕は大軍を率いて京師を出発、その十月には早くも洛陽を陥れ、翌年八月には長安に攻め入って、羌主姚泓（三八八―四一七）を生擒し、九月、その彝器・渾儀・土圭の属を没収して京師に献上、その他の珍宝珠玉は将帥たちに分賜し、姚泓を建康に送ってこれを市で斬刑に処し、後秦を滅した。後秦三主三十三年。（『宋書』武帝紀）

以上のごとく、前後二次にわたる劉裕の北伐は、いずれも圧倒的な大勝利を収めて、劉裕の強大な軍事的実力を

まざまざと内外に見せつける結果となった。顧みれば、永嘉の乱（三〇七―三二一）以来、久しく夷狄の蹂躙に委ねられてきた中原を克復することは、東晋の王公貴族たちが長年にわたって抱きつづけてきた悲願であったが、祖逖（二六六―三二一）・褚裒（三〇三―三四九）・殷浩（？―三五六）・桓温（三一二―三七三）・劉牢之（？―四〇二）等、歴代の豪族・武将たちの度重なる北伐遠征にもかかわらず、いつも失敗・撤退に終るばかりで、ついに成就がかなわなかった難事業であった。ところが、この長年の悲願とも言うべき難事業が、今や劉裕の軍事力によって、ものの見事に達成できたわけである。この北伐の絶大な成果は、劉裕の威信を内外に顕示するのに、正に充分過ぎるほどに充分な壮挙であった。

しかしながら、この劉裕の北伐は、もともと、中原を克復して北来の王公貴族の宿願をかなえ、その喝采を博するためではなかったようである。なぜならば、劉裕には元来そのような義理立てを王公貴族に報ずる義務もなければ必要もなかったはずであり、また劉裕は、北伐の目的を達するや否や、さほど長くは中原に駐留せずに、さっさと江南に引き揚げているからであり、さらには彼が京師建康に凱旋した直後、義熙十四年（四一八）六月には、あたかも朝廷で前もって準備されていたかのように、早々と相国・宋公・九錫の命を受けているからである。恐らく劉裕は、東晋政権を奪取して新王朝を創建するに臨み、まずは北来の門閥貴族や内外各層の人士に対して、最も有効に自らの絶対的な権勢を顕示しておく必要があったのではないか。

とにかく東晋の最終末期、劉裕による内乱の鎮定と北伐の大勝は、かの淝水の戦を契機として顕著になってきた無能無策な門閥貴族の衰退と、実力本位の新興軍権の擡頭とを正に如実に具象化するものであった。

ちなみに『世説新語』容止篇に言う：

石頭の事故（蘇峻の反乱）にて、朝廷傾覆（顚覆）す。温忠武（温嶠）は、庾文康（庾亮）と陶公（陶侃）に投じて救ひを求む。陶公云ふ、「肅祖（東晋の明帝司馬紹）の顧命（遺詔）は（拙者に）に及ぶを見ず。且つ蘇峻の亂を作すは、釁（反乱の原因）諸庾に由る。其の兄弟を誅するも、以て天下に謝（陳謝）するに足らず」と。時に庾（亮）は温（嶠）の船の後（後尾）に在りて之を聞き、憂怖して計無し。

別日、温（嶠）は庾（亮）に勸めて陶（侃）に見えしむるも、庾（亮）は猶豫（躊躇）して未だ往く能はず。温（嶠）

曰く、「渓狗は我が悉（知悉）する所なれば、卿（貴君）は但だ之に見えよ。必ず憂（気づかい）無からん」と。庾（亮）は風姿神貌あり。陶（侃）は一見して便ち觀を改め、談宴竟日、愛重頓に至る。

「渓狗」とは、渓族出身の番犬。陶侃（二五九―三三四）は、廬江尋陽（江西省九江市）の人。蘇峻の乱を平定した東晋王朝の柱石。東晋初期の貴族全盛時代には、たとえ陶侃のような名将であっても、時に北来貴族からこのような蔑称で呼ばれることもあったが、東晋も後期になると、かかる傲慢な貴族の態度は全く影を潜めてしまう。この現象も、当時の門閥貴族の衰退と新興軍権の擡頭を如実に象徴する一適例と言えるであろう。

四　謝霊運の性格とその貴族的特権意識

精強な北府軍団を率いて新興軍権の頂点に立った劉裕は、やがて程なく東晋の安帝（在位三九七―四一八）を殺して恭帝（在位四一九―四二〇）を立て、並み居る門閥貴族を制圧して、永初元年（四二〇）夏六月、ついに禅譲を受けて皇帝の位に即き、劉宋王朝を創建した。

一方、当時、門閥貴族社会の頂点に在った陳郡の謝氏、なかんずくこの名門随一の貴公子であった謝霊運（三八五―四三三）は、新興軍事政権の下、果たして如何なる運命をたどったのであろうか。その生卒も彼に頗る近い南朝梁の沈約（四四一―五一三）の『宋書』謝霊運伝には、彼の稟性や環境、生涯の遍歴について以下のごとく言う――

a．謝靈運は、陳郡陽夏の人なり。祖は玄、晉の車騎將軍（二品）。父は瑒、生れながらにして慧ならず、祕書郎（六品）と爲るも、蚤に亡す。靈運、幼にして便ち穎悟、玄は甚だ之を異とし、親知（親友）に謂ひて曰く、「我乃ち瑒を生むに、瑒は那ぞ靈運を生むを得たる」と。

靈運、少くして學を好みて、群書を博覧し、文章（詩文）の美、江左に逮ぶもの莫し。從叔の混、特に之を知愛（賞賛・愛顧）す。康樂公に襲封せられ、食邑二千戸。……性奢豪（奢侈・豪華）にして、車服鮮麗、衣装器物、多く舊制（古い体裁）を改め、世共に之を宗（模範）として、咸く謝康樂と稱するなり。

この記録によれば、霊運は、つとに幼童のころからずば抜けて頭がよかったために祖父から常にちやほやされな

がら成長し、弱少以後も学問は該博で詩文も抜群であったので周囲から特別に愛顧重視され、しかもその生活は、名族の貴公子にふさわしく、贅沢三昧で新しい傾向を追い求めて止まなかったらしい。思うに、このように万事に恵まれ過ぎた弱少の時期は、貴族万能の安定時代ならともかく、波瀾万丈の変革期に適応する柔軟な人格を育成できるはずもない。果たせるかな、その後の霊運の生きざまは、かなり褊陋傲慢なものであった。

b．同じく『宋書』謝霊運伝には、宋朝創建当初、武帝の永初元年（四二〇）前後のころと、永初三年（四二二）夏、霊運三十八歳の時、永嘉太守に出された前後とにおける彼の尋常ならざる挙動を記して、以下のごとく言う――

（東晋の義熙十四年六月）宋國黄門侍郎に除せられ、相國從事中郎・世子左衛率に遷る。坐して輒ち門生（桂興）を殺し[12]、官を免ぜられる。

高祖（劉裕）命を受けて、（霊運の）公爵を降して侯と爲し、食邑も（二千戸を）五百戸とす。起（起家）して散騎常侍（三品）と爲り、太子左衛率（五品）に轉ず。霊運、爲性（本性）は褊激（わがまま）にして、多く禮度（礼儀作法）に愆ふ。朝廷は唯だ（霊運の）文義（文辞）を以て之を處したるのみにして、應實（相応の実職）を以て相許さず。自ら謂へらく「才能（才智・能力）は宜しく權要（権威ある重要な地位）に參ずべし」と。既に知（認知）されず、常に憤憤（憤懣）を懐く。……

少帝（在位四二三）即位し、權は大臣（徐羨之）に在り。霊運は異同（異議）を構扇（扇動）し、執政を非毀す。司徒徐羨之等は之を患ひて、出だして永嘉太守と爲す。郡に名山水有り。霊運は素より愛好する所、出守（地方に出されて太守となること）既に志を得ず、遂に意を肆にして遊遨し、諸縣を徧歴して、動に旬（十日）朔（一か月）を踰え、民間の聽訟、復た懐に關せず。至る所、輒ち詩詠を爲し、以て其の意を致す焉。郡に在ること一周（一年）、疾と稱って職を去る。從弟の晦・曜・弘微等、並びに書を與へて之を止むるも、從はず。

長じて仕官した以後も霊運は、時に激情に駆られて前後の見境もなく自分の門生までも殺してしまうし、わがままで礼儀作法もわきまえず、独り善がりで自分の意に沿わない処遇には不平たらたら。永嘉太守になっても真面目に職務に励まず、旬朔を越えて管内各地を遊びまわる始末。正に貴族的特権意識むきだしの生きざまであった。

c．そして、霊運のこの貴族的特権意識まるだしの生活態度は、京師帰任後も何ら変わるところがなかった。つづいて『宋書』謝霊運伝には言う――

（霊運）既に自ら以へらく「名輩（名望・年輩）・才能（才智・能力）、應に時政に參ずべし」と。初め召されたるとき、便ち此を以て自許（自負）す。既に至れば、文帝は唯だ文義（文辞）を以て接せられて、上宴に侍する毎に、談賞（談論・品評）するのみ。王曇首・王華・殷景仁等は、名位素より之を踰えざるに、並びに任遇（信任・重用）せらる。靈運、意平らかならず、多く疾と稱して朝直（朝廷で当直）せず。池を穿ち援（生垣）を植り、竹を種ゑ果を樹うるに、公役（公僕）を驅課（駆使・課役）して、復た期度（限度）無し。郭（外城）を出でて游行し、或ひは一日に百六七十里、旬（十日）を經るも歸らず、既に表聞（上表申聞）無く、又た請急（休暇申請）もせず。上（文帝）、大臣を傷つけんことを欲せず、諷旨して自解（自己解任）せしむ。靈運、乃ち上表して疾と陳べ、上は假（休暇）を賜ひて東歸す。

文帝の細かな配慮にもかかわらず、生来「褊激」（わがまま）で自負心ばかりが強い霊運には、この天子の行き届いた厚情も、既に時世が変っていたことも、残念ながらこれを心底から感じ取る器量はなかったらしい。と言うよりは、かかる褊激と放縦が、結局は霊運の命取りにつながってゆくことになる。

d．始寧（浙江省上虞県）の荘園に還った謝霊運の遨遊ぶりは、「遊娛宴集、夜をもって昼に続ぎ」、傍若無人、

まことに人を驚かすものがあった。つづいて『宋書』本伝には言う――

靈運、父祖の資に因りて、生業（資財）甚だ厚し。奴僮は既に衆く、義故（縁故）・門生（食客）も數百、山を鑿ち湖を浚へて、功役（労役）已むこと無し。山を尋ね嶺に陟れば、必ず幽峻を造め、巖嶂千重なるも、備さに盡くさざる莫し。登躡（山路の踏破）には常に木履を着け、山を上るときは則ち前齒を去り、山を下るときは其の後齒を去る。

嘗て始寧の南山より、木を伐りて逕（小径）を開き、直ちに臨海（浙江省臨海県）に至る。從者數百人。臨海太守の王琇は驚駭して、山賊たらんと謂爲（以為）ひたるも、徐て是れ靈運なりと知り、乃ち安んず。

この時、靈運は、父祖以来の莫大な財力にまかせて、一三〇キロメートルにも及ぶ大きな道路新設工事を実施し、

無慮数百人もの従者を引き連れて、さぞ自分では領主気取りの実地検分をしていたのであろう。

e．さらにつづけて『宋書』本伝には言う――

會稽（浙江省紹興市）の東郭に回踵湖有りて、靈運、決（堤防を決潰）して以て田と爲さんことを求めたれば、太祖（文帝）は州郡に令して履行せしむ。此の湖は郭（外城）を去ること近く、水物（水産物）の出づる所なれば、百姓之を惜しみ、太守の孟顗、堅執（固執）して與せず。靈運、既に回踵（湖）を得ざれば、又た始寧の岯崲湖を田と爲さんことを求むるも、顗は又た固執す。靈運は謂へらく「顗は民を利するに存（留意）するに非ずして、正だ湖を決して多く生命（魚介類）を害せんことを慮り、言論もて之を毀傷するのみ」と。顗と遂に讎隙（怨恨）を構ふ。靈運横恣（勝手気まま）にして、百姓驚擾（驚慌騒乱）するに因って（口実として）、乃ち其（靈運）の異志（謀反心）を表（露出）し、兵を發して自ら防ぎ、露板（奏章）もて上言す。

この時、たとえ霊運に謀反心がなかったにせよ、霊運は、百姓の不利など全く意に介せず、どこまでも自分の「横恣」を貫徹しようとしている。

f．前述の回踵湖・岯崲湖事件は、霊運の上京・参内による釈明の結果、ともかくも一応決着がついたが、霊運は、再び始寧の荘園に帰ることなく、臨川（江西省臨川県）の内史（諸王国の民政長官。五品）に任命されることとなった。その後の彼の挙動については、『宋書』本伝に以下のごとく言う――

太祖（文帝）は其の誣ひらるるを知りて、罪せざるなり。（然れども）東歸せしむるを欲せず、以て臨川内史と爲し、秩中二千石を加ふ。郡に在りても遊放（遊蕩・放縱）、永嘉のときに異ならず、有司の糾（糾弾）する所と爲る。司徒（民政長官。一品）、隨州從事の鄭望生を遣使（派遣）して靈運を收めしむ。靈運、望生を執録（逮捕）し、兵を興して叛逸（叛亡）し、遂に逆志有り。……追討して之を禽へ、廷尉（司法長官）に送って罪を治（審査）せしむ。廷尉、「靈運は部衆を率ゐて反叛し、論（判定結果）は斬刑に正（合）す」と奏す。上は其の才を愛し、官を免じて已めんと欲す。彭城王の義康は堅執（固執）して、「宜しく恕すべからず」と謂ふ。乃ち詔して曰く、「靈運は罪釁（罪行）纍りに仍なり、誠に合に法を盡くすべきも、但だ（祖父の）謝玄は、勲　微管（管仲[13]）に參ずれば、宜しく宥（恩赦）は後嗣に及ぶべし。死一等を降し、徙して廣州（広東省広州市）に付する

を可とす」と。

其の後、……有司、又た法に依りて收治（逮捕・処罰）せんことを奏し、太祖は廣州に詔して棄市の刑を行はしむ。……時に元嘉十年（四三三）、年四十九。

ちなみに、唐の李延寿の『南史』謝霊運伝論には、

靈運の才名、江左に獨り振う。而れども猖獗（気ままで思いのままに振舞う）已まずして、自ら覆亡を致けり。

と評し、また宋の司馬光『資治通鑑』宋紀四（文帝元嘉十年）にも、

靈運、才を恃みて放逸（勝手気ままで）、陵忽（軽蔑）する所多し。故に禍に及ぶ。

と言う。まことに霊運の棄市は、時代がすでに変ったことも弁えず、相変らず「褊激」「猖獗」「放逸」に終始した超一流門閥の貴公子が自ら招いた、悲しくも哀れな生涯の終焉であった。

五　広大清雅な荘園と貴族的才学の誇示　――山水文学への傾注――

ところで、謝霊運の山水詩は、正にこのような彼の「褊激」「放逸」な生涯の過程の中から作られはじめた新しい文芸であった。そして更にこれを具体化して言えば、謝霊運は、すでに晋宋の間から徐々に芽生えつつあった山水愛好の風潮に影響されながらも、彼が本格的に山水を題材として新しく詩作に傾注しはじめた時期は、ようやく彼が三十八、九歳という生涯の成熟期に入りはじめたころ、久しぶりに故郷始寧の別墅に帰り、その美しい山水に接してからのことであった。

この故郷始寧の別墅、その四周に美しく広がる自己の荘園は、貴族的特権意識まる出しの「褊激」「放逸」な謝霊運にとって、新興の軍事政権の下、なんとか屈辱的な官僚生活から離脱できる正に人世の別天地であった。彼は、この荘園においてこそ、父祖が残してくれた莫大な資産と権勢を背景にして、図らずも甘く懐しい年少時代の満ち足りた生活に立ち返り、あたかも独裁的な領主のごとく、ほとんど制約らしい制約も受けずに、比較的自由な生活を享受満喫できたわけである。彼が「始寧の墅に過る」詩の末尾に、「手を揮って郷曲（郷里始寧の人びと）に告ぐ、

三載にして帰旋を期す。且く為に枌檟を樹え、願言に孤かしむること無かれ」と詠じた所以である。

かくて中央政界の不愉快きわまる桎梏から遠く離れて、ほとんど無制限にわがままが通用する永嘉太守の時代、これにつづく始寧の別墅・会稽の荘園での生活は、正に「褊激」「放逸」な謝霊運にとって快適きわまる別世界であった。さぞかし彼の目には、俗界を離れたその山水が、とりわけ美しく見えたことであろう。

果たせるかな、霊運の永嘉・会稽における生活ぶりは、その財資と権威をほしいままにした「肆意」「横恣」の極みであった。すなわち、永嘉に在っては、「肆意遊遨、諸県を徧歴して、動に旬朔を踰え、民間の聴訟、復た懐に関せず」、また始寧・会稽に在っても、「奴僮は既に衆く、義故・門生も数百、山を鑿ち湖を浚へて、功役已むこと無く」、「始寧の南山より、木を伐り径を開きて、直ちに臨海に至り、従者数百人」であったと言う。そして、こうした謝霊運の「肆意」「横恣」な行状のかずかずを見るにつけても、かつて彼が三十五歳ごろ、激怒にまかせて気に入らない門生を虫けら同然に斬り殺した「褊激」な事実を今更のごとく想起させる。

そうした意味で、謝霊運の永嘉・会稽における豪恣放逸な生活は、その山水を賛美賞玩した詩作をも含めて、本質的には、老荘の静閑な隠遁思想とは懸絶したものであり、ましてや衆生を済度すべき仏教思想、釈尊の悟りに直結すべき頓悟成仏思想とも無縁なものであった。

とはいえ、傲慢で誇り高き謝霊運にとって、みずからの貴族的自尊心を一応満足せしめ、しかも新興の軍事政権と社会階層に対して取りあえず無条件に誇示できるものは、父祖伝来の広大清幽な荘園の山水と、洗練された貴族的才学であった。この壮麗な山水と精博な才学とは、いずれも粗野な新興階層には容易に手の届かない高邁な境地であり、正に貴族の他に優越する世界であった。かの『文心雕龍』明詩篇に、「宋初の文詠は、体に因革有り。荘老退くを告げて、山水方に滋し。采を百字の偶に儷べ、価を一句の奇に争ふ。情は必ず貌を極めて以て物を写し、辞は必ず力を窮めて新を追ふ」と言われた所以である。謝霊運が自らの山水と才学を当時の貴賤士庶に誇示しようとするかぎり、できるだけその内容に深玄さ清幽さを附与し、その表現も美しく洗練された出来映えにすることは、創作上必須不可欠の条件であった。

ここで読者は、参考までに当時の貴族文人たちの間で流行していた「清談」の実態を想起してほしい。いうまで

もなく当時の一般的「清談」は、じっくりと腰をすえて念入りに人生の根源や道理の本質を探求すると言うよりも、むしろ相手の声に応じて間髪を入れず、気の利いた上っ面だけの形式論理を応酬して、言わば精博犀利な才知と学識を競い合う哲学談論の場であった。思うに、謝霊運の山水詩の場合も、多分にその雰囲気が漂っているように見受けられる。すなわち、たとえそれが霊運の虚栄虚飾的創作意図を含むにせよ、彼の山水詩全般に色濃く漂う老荘思想、隠遁思想、あるいは仏教の頓悟思想はもちろん、整斉巧緻な対偶表現、新奇殊妙な創作発想さえも、当時の貴族文人がその「清談」の場で極めて重視した貴族的素養であった。のみならず、この素養は、何よりも現実的な効用として、目前の粗野な新興階層を辟易させ、貴族の優越性をひけらかすのに絶好の武器であった。

幸いにも謝家には、つとに謝安のころから、斬新奇警な文学的発想をうながす洗練された文化的雰囲気が存在していたようである。例えば『世説新語』言語篇には言う——

謝太傅（謝安）、寒雪の日に内集し、兒女と文義（文辞）を講論す。俄かにして雪驟す（激しく降る）。公、欣然として曰く、「白雪紛紛、何の似たる所ぞ」と。兄（謝朗）の子の胡児（謝朗）は曰く、「鹽を空中に撒けば、差（少しは）擬す可し」と。兄（謝奕）の女（謝道蘊）は曰く、「未だ若かず、柳絮の風に因って起こるには」と。公、大いに笑樂（歓喜満悦）す。

才女謝道蘊は、上空から降りしきる粉雪を見て、意外にも「地上から吹き上げる旋風に乗って上空に舞い上がる柳絮」に譬えたのである。恐らく、このように斬新で奇警な文学的発想は、すでに謝安のころから、今後の貴族文化を支える一要件として自覚認識され、その子女たちにも暗暗裏にこれを要請していたのであろう。

のみならず謝霊運は、若年のころ「好学にして群書を博覧し、文章の美、江左に逮ぶもの莫」かったので、従叔の謝混から特に「知愛」されていたようである（『宋書』本伝）。謝混は、その後、晋安帝の義熙八年（四一二）九月、劉毅に党したために時の太尉劉裕によって討滅されたが、生来「善く文（詩文）を属り」、しかも上述のごとく義熙年間に至って詩文改革の急先鋒であった。だとすれば、この謝混の若い霊運に対する革新的影響力も恐らく決して少なくはなかったであろう。

とにかく劉宋王朝開元当初、新興軍事政権・新興支配階層の下、かつては望月の欠けたることなき超一流貴族の

謝霊運が無条件に彼らに誇示し得るものは、煎じ詰めたところ、まずは自らの広大清幽な荘園の山水であり、これを斬新典雅に表現できる精博で洗練された貴族的才学であった。そして、この両性格を見事に併せ持って茲に新しく登場してきた文芸形態が、正に謝霊運自身の山水詩であり、さらには彼の畢生の力作「山居の賦」である。

ところで、この「山居の賦」は、現存する正文だけでも優に四千字を越える大作であって、その残存全文は、詳細妙絶な自注と共に沈約『宋書』謝霊運伝に収録されているが、その壮大な構想と精妙な表現は、かの班固「両都の賦」・張衡「二京の賦」・左思「三都の賦」にも匹敵する長篇の名作であること、すでに衆目の認めるところである。そして、さらに驚いたことに、この賦は、古今の文学作品にその類例を見ること稀な自注までもが、各段落に極めて詳細精到な筆致で一々附記されている。霊運のかかる異常な念の入れ様は、思うに尋常の事ではない。

謝霊運が「山居の賦」を作った事情については、まず『宋書』謝霊運伝に、

> 靈運の父祖は、並びに始寧縣（浙江省上虞県）に葬られ、并せて故宅及び墅有れば、遂に籍を會稽（郡）に移して、別業（別荘）を修営（建造）す。山に傍ひ江を帯らし、幽居（幽寂な住居）の美を盡くす。隱士の王弘之（三六五―四二七）・孔淳之（三七二―四三〇）等と、縱放（ほしいまま）を娯しみと爲し、終焉の志有り。一詩の都邑に至ること有る毎に、貴賤競ひて寫さざる莫く、宿昔（旦夕）の間に、士庶は皆徧く、遠近も欽慕（敬慕）して、名は京師を動かす。「山居の賦」并びに自注を作りて、以て其の事を言ふ。

と言い、また霊運自身も「山居の賦」の序に、かなりな謙辞を交えつつも以下のごとく述べる――

> 古、巣居穴處を「巖棲」と曰ひ、棟宇の山に居るを「山居」と曰ひ、林野に在るを「丘園」と曰ひ、郊郭（郊外）に在るを「城傍」と曰ふ。四者は同じからず、理（事理）を以て推す可し。心（心境）を言ふや、黄屋（帝王の宮室）も實は汾陽（隱者の居処）[14]に殊ならず。事（事実）に即するや、山居は良に市廛（市場）に異なる有り。疾を抱き閑に就きて、性情に順從し、敢へて樂しむ所に率ひて、以て賦を作る。揚子雲は云ふ、「詩人（『詩経』の詩人）の賦は、麗（美麗）にして以て則（法則）あり」と。文體は、宜しく兼ねて以て其の美を成すべし。今、賦する所は、既に京都・宮觀・遊獵・聲色の盛に非ずして、山野・草木・水石・穀稼の事を叙ぶ。才は昔人より乏しく、心は俗外に放ち、文の「則」を詠ずるには勉めて之に就く可きも、「麗」を求むるは邈として以て

遠し矣。覧る者は、張（衡）・左（思）の艶辭を廢して、臺（？）・皓（四皓）の深意を尋ね、飾を去って素を取らば、儻いは其の心に値らんのみ。意は實に言表（言外）にありて、書は（意を）盡くさず。遺迹（残した足跡）にのみ意を索む、之（意）を託すれば賞（山水の賞玩）有らん。

「およそ人の真意は正に言外にあるものであり、まして文字で書いた詩文などは真意を表現し尽くせるものではない。しかし、紙面に書き捨てた詩文によってのみ作者の真意を探り求めることができるのだから、とにかくこの『山居の賦』に私の真意を託してさえおけば、これを読んだ人びとは、この美しい山居周辺のすばらしい山水を賞玩することもできるだろう」――まことに持って回った言い方だが、まずは「京師」をはじめ「都邑」の「貴賤」「士庶」を念頭において「山居の賦」を作った霊運の意図は、誰の目にも見え見えである。霊運にとって是が非でも自らの荘園のすばらしさを貴顕衆庶に誇示するためには、この際、できるだけその正文に「幽居の美」を尽くすだけではなく、敢えて伝統的な詩文作品の表現形態を無視してでも、特に詳細周到で具体的な自注の添加を必要としたのであろう。

以上のように謝霊運の「山居の賦」の成立経緯を見てくると、それにつけてもおのずから想起される当時の文学作品は、ほかならぬ陶淵明（三六五？―四二七）の「帰去来の辞」である。もちろん陶淵明は、当時の超一流の貴族に生れた謝霊運とは全く比較にならない寒門の出自であって、ようやく江南尋陽（江西省九江市）の一地方豪族にしか過ぎなかったけれども、この「帰去来の辞」作成の経緯については、『晋書』・『宋書』の隠逸伝（陶潛）によれば、彼四十一歳の冬、彭沢県（江西省彭沢県）県令に在任中、尋陽郡守が、ある年若い督郵（郡守に代って管下の諸県を督察する郡の属吏）を彭沢県に差し向けようとした時、下僚が正装の束帯を着けて出迎えるべき旨を言上したところ、彼は嘆息して「吾、五斗米（わずかな官俸）のために腰を折り、拳々として郷里の小人に事ふる能はず」と言い捨て、即日「印綬を解いて職を去り、乃ち『帰去来の辞』を賦し」、さっさと郷里の柴桑県（江西省九江市西南部）に帰った、と言う。恐らく、この「督郵」は、淵明と同郷の出身で、都合よく時流に乗じた風雲児だったのであろう。

ちなみに、陶淵明の「帰去来の辞」には、周知のごとく、久しぶりに帰ってきた我が家の稚子や僮僕の暖かい歓

迎ぶり、自宅での心安まる生活などを詠じた後、広大な荘園各処のさまざまな景物に言及して、

園は日びに渉めば以て趣を成し、　門は設くと雖へども常に閉ざせり。
扶老（籐の杖）を策つきて以て流り憩ひ、　時に首を矯げて遐かに観やる。
雲は無心にして以て岫を出で、　鳥は飛ぶに倦みて還るを知る。
景は翳翳として以て將に入らんとし、　孤松を撫して盤桓（徘徊）す。

と詠じ、さらに、

或るときは巾車（幌の車）に命じ、　或るときは孤舟（一艘舟）に棹さす。
既に窈窕（深玄）として以て壑を尋ね、　亦た崎嶇（険峻）として邱を經たり。
木は欣欣として以て榮に向かひ、　泉は涓涓として始めて流る。
萬物の時を得たるを善しとし、　吾が生の行くゆく休するを感ず。

と詠じてもいる。思うに、「帰去来の辞」と「山居の賦」とは、その創作動機といい、その発想方向といい、驚くほどに相似た路線をたどっている。この陶・謝の両者は、それぞれの出自こそ大きな懸隔があったとはいえ、これを大局的に見れば、やはり同じ時代の子であったと言えるのではないか。

最後に、本論の一応の総結として「山居の賦」の一節とその自注を抄出して、この賦の創作意図を私なりに具体的に確認しておくことにしよう。例えば、すでに鈴木虎雄「山水文学と謝霊運」（『支那文学研究』八二頁以下）に「生彩ある処」と絶賛した一節であるが、まずその正文には「南北の両居」の広大さを叙べて、

若し迺ち南北の兩居は、水通じ陸阻しく、風を觀（観察）し雲を瞻（仰視）して、方めて厥の所を知る。

と詠じ、その自注には、これを解説して次のごとく言う——

「兩居」とは、南北の兩處に、各〻居止（住居）有るを謂ふ。峯嶋（峰と崖）阻絶して、水道（川筋）の通ずるのみ。「風を觀し雲を瞻して」、然る後に方めて其の處所を知る。

つづいて、その正文には「南山」の居室や周囲の景物を叙べて、

南山は則ち渠（堀り割り）を夾みて二つの田（耕作地）、嶺を周りて三つの苑（放牧場）あり。九つの泉は澗（谷

川）を別かち、五つの谷は巘（山頂）を異にす。群峯は參差（高く低く）として其の間に出で、連岫は複陸（重畳）として其の坂を成す。衆流は漑灌して以て近きを環り、諸堤は擁抑（洪水を抑制）して以て遠きに接がる。遠堤は陌を兼ね、近流は湍を開く。阜を淩え波に泛かび、水もて往き歩みて還る。還るには回（迂回）し往くにも帀（周回）す、枉渚（彎曲した渚）・員巒（山頂の丸い峰）。美を呈し趣を表すもの、胡ぞ勝げて單（殫）くす可けんや。

北頂に抗って以て館を葺き、南峯を瞰して以て軒を啓く。曾崖（高く聳える断崖）を戸裏に羅ね、鏡瀾（清く静かな水面）を窗前に列ぬ。丹霞（紅雲）に因って以て楣を頼らめ、碧雲に附して以て椽を翠にす。奔星（流星）の俯馳（出没）するを視、□□の未だ牽かざるを顧みる。鵾鴻（大鳥）すら翻翥するも及ぶ莫く、何ぞ但だ燕雀（小鳥）の翩翾たるのみならんや。

汐泉（側傍から湧き出る泉）は傍に出でて、東檐（のき）に潺湲（さらさら）たり。桀壁（切り立った険しい崖）は對跱して、西霤（房屋）に硿礌（もりもり）たり。修竹は葳蕤として以て翳薈（茂りおおう）し、灌木は森沈として蒙茂（おおい茂る）す。蘿は曼延して以て攀援（延伸）し、花は芬薫として媚秀（嬌美秀麗）なり。日月は光を柯間（枝間）に投じ、風露は清を崿岫（山懐や山の洞穴）に披く。

夏は涼しく寒は燠かく、時に隨ひて適を取る。階基（階段）は回互（回迂交錯）し、橑櫺（屋宇）は乗隔（粗密隠顕）す。此れ焉に寢（住居）を卜びて、水を翫で石を弄しむ。邇づきて即ち回り眺め、終歳斁くこと罔し。美しき物の遂に化ろふを傷み、浮なき齡の借るが如きを怨む。眇かに人群より遁逸して、長へに心を雲霓に寄す。

と詠じ、その自注には、これまた彫琢した文辞をつらねて以下のように念入りな文学的解説を付け加えている――

「南山」は、是れ開創（開拓）して居を卜せしの處なり。江樓より路を歩み、山嶺を跨越し、田野を綿亘し、或いは升り或いは降りて、三里許りに當たる。塗路に經見する所や、則ち喬木・茂竹は、畛に縁ひ阜に彌り、横波・疎石は、道を側め流れに飛びて、以て寓目の美觀と爲す。所居の處に至るに及びては、西山より道を開き、東山に迄るまで、二里有餘。南は悉く連嶺・疊鄣（連延たる山嶺・重畳たる山峰）、青翠は相接し、雲煙・霄路（たちこめる雲霧・高山の小径）、殆ど倪際（際限）無し。

逕（径）に従って谷に入るに、凡そ三つの口（入り口）有り。方壁西南石門世□南□池東南、皆　別に其の事を載す。

路に縁って初めて入り（入った当初）、竹逕を行けば、半路（道程の中間）にして闊け、竹を以て澗（谷川）を渠む。既に入れば、東南は山渠（山の溝渠）に傍ひ、展轉（各種各様）として幽奇、處を異にすれども美を同じくす。路の北なる東西（東から西へ）の路は、山に因って鄣（土塀）と爲し、正北の狹き處は、湖に踐みて池（庭池）と爲す。南山は相對して、皆崖巖有り。東北は壑に枕み、下は則ち清川鏡の如く、傾柯（斜めに垂れた枝）・盤石（巨大な岩石）、隩（入り江）を被ひ渚（水際）に映ず。

西巖は林を帶らせ、潭を去ること可（大約）二十丈（約五〇メートル）許、基（土台）を葺（修建）し、宇（屋宇）を構（建築）して、巖・林の中に在り。水は石階を衞り、窻を開けば山に對す。仰ぎて曾峯（重畳たる山峰）を眺め、俯して濬壑（深谷）を鏡る。

巖を去ること半嶺（山腹半ば）にして、復た一樓有り。迴望（遠望）し周眺して、既に遠趣（高遠な風趣）を得、還た西館を顧みて、望むに窻戸（窓）に対す。

崖に縁って下れば、密竹　逕を蒙ひ、北より直ちに南すれば、悉く是れ竹園（竹やぶ）にして、東西百丈（約二五〇メートル）、南北百五十五丈（約三八〇メートル）。北は近峯に倚り、南は遠嶺を眺め、四山（四面の山）周回し、溪澗（渓流）交〻過ぎ、水石林竹の美、巖岫隈曲の好、備さに之を盡くせり矣。刊翦（開拓）・開築（創建）して、此れ焉に居處し、細趣・密翫、具さに記す可きに非ず。故に較し大勢を言ふのみ。

以上、見てのとおり、この「山居の賦」は、ただに正文のみならず、これを解説したはずの自注までも、謝霊運の念の入れようには尋常ならざるものがある。すなわち、この賦の正文は、その序に述べる作者の謙辞にもかかわらず、かの班固・張衡・左思らの「京都」の長篇辞賦作品と比較して、どこに本質的な創作上の相違があると言うのか。また、この自注は、あたかも一篇の独立した紀行文を読む思いであって、至るところに美辞麗句をつらね整斉たる対偶を用い、もしかすると霊運は正文以上に創作意欲を傾けたようにさえ見受けられる。

これを要するに、当時の謝霊運にとって、山水ないし山水文学は、まず何よりも彼自身の広大秀麗な荘園と洗練

された貴族的才学とを誇示する最適の手段であり、さらには永嘉時代を含めて、「夢よ、もう一度」――かつての貴族の絶対的な優越感に改めて陶酔し得る最後の甘美な世界であったのではないか。思えば、東晋の貴族文人にとって、「荘老」思想は、その全盛期における内面的な拠り所であり、「山水」文学は、その衰退期における誇り高き見せ場であった。

（二〇〇三年一〇月一三日稿）

注

（1）本稿を草するに当たって、私が参照した最近の主要な論著を時代順に列挙すれば、おおむね左のごとくである。山水詩研究の推移をたどる上でも、はなはだ興味深い。

1．鈴木虎雄「山水文学と謝霊運」（『支那文学研究』所収。京都　弘文堂。一九二五）
2．葉笑雪『謝霊運詩選』（上海　古典文学出版社。一九五七）
3．福永光司「謝霊運の思想」（日本道教学会『東方宗教』一三・一四合併号。一九五八）
4．小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』（東京　岩波書店。一九六二）
5．大川富士夫「謝霊運と仏教」（東京教育大学『東洋史学論集』第七『中国の宗教と社会』所収。一九六五）
6．林文月『謝霊運及其詩』（国立台湾大学『文史叢刊』一七。一九六六）
7．小川環樹「中国の文学における風景の意義」（『立命館文学』二六四。一九六七。『風と雲――中国文学論集――』朝日新聞社。一九七二）
8．林文月『山水与古典』（『純文学叢書』七〇。台北　純文学出版社。一九七六）
9．荒牧典俊「劉宋期における教相判釈の成立――謝霊運『弁宗論』と劉虬『無量義経序』――」（京都大学人文科学研究所『中国中世の宗教と文化』所収。一九八二）
10．小尾郊一『謝霊運――孤独の山水詩人――』（東京　汲古書院。一九八三）
11．矢淵孝良「謝霊運山水詩の背景――始寧時代の作品を中心にして――」（『東方学報　京都』五六所収。一九八四）

12. 衣川賢次「謝霊運山水詩論――山水のなかの体験と詩――」（『日本中国学会報』三六所収。一九八四）
13. 志村良治「山水詩への契機――謝霊運の場合――」・「謝霊運と宗炳――「画山水序」をめぐって――」（『志村良治著作集』Ⅰ『中国詩論集』所収。東京　汲古書院。一九八六）
14. 興膳宏『中国の文学理論』（東京　筑摩書房。一九八八）
15. 曹道衡・沈玉成『南北朝文学史』（北京　人民文学出版社。一九九一）
16. 高津孝「中国の山水詩の外界認識」（鹿児島大学法文学部『パラダイム論の諸相』所収。一九九五）
17. 牧角悦子「謝霊運山水詩における自然描写の特質」（『二松学舎大学東洋学研究所集刊』二八所収。一九九八）
18. 周勛初『魏晋南北朝文学論叢』（南京　江蘇古籍出版社。一九九九）
19. 今場正美「玄言詩の文学史における意義」（『立命館文学』五六三所収。二〇〇〇）
20. 李文初『漢魏六朝文学研究』（広東人民出版社。二〇〇〇）

（2）許詢の生卒については、石川忠久「許詢について」の第三節「生卒」（『桜美林大学中国文学論叢』第二号、一九七〇年）、および同『陶淵明とその時代』（東京、研文出版刊、一九九四年）の考証による。

（3）孫綽の生卒については、蜂屋邦夫「孫綽の生涯と思想」（『東洋文化』第五七号、一九七七年）の考証による。

（4）『詩品』中品（晋、宏農太守の郭璞）に「潘岳を憲章し、文体相輝き、彪炳として翫す可し。始めて永嘉の平淡の体を変ず」とあり、また同じく中品（晋、太尉の劉琨）に、「其の源は王粲に出づ」と言う。

（5）『詩』小雅「四月」に「秋月凄凄、百卉俱に腓む」と。その毛伝に「凄凄とは、涼風なり。卉は、草なり。腓とは、病むなり」と。

（6）『老子』第十六章に、「根（根源）に帰るを静と曰ひ、静を命に復ると曰う」と。

（7）『謝霊運――孤独の山水詩人――』二九一―二九四頁。

（8）この詩の二句「過澗既厲急、登棧亦陵緬」に見える「厲」「陵」は、いずれも越える意。例えば、晋の葛洪『抱朴子』内篇の序に、「仮令に翅を奮へば、則ち能く玄宵（大空）を陵厲す」と。葛洪のこの二句、『晋書』葛洪伝に引くところも亦た同じ。

（9）小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』二九一―二九五頁、五三〇―五五九頁。および同『謝霊運――孤独の山水詩人――』二九七頁。

（10）「根本」とは、京師の建康を謂う。『詩』大雅「民勞」に、「此の中国を恵（愛）す」と言い、その毛伝に「中国とは、京師なり」と釈し、さらにその鄭箋に「京師なる者は、諸夏の根本なり」と。

（11）この一句、『論語』憲問篇の孔子の言に基づく。曰く「管仲微かりせば、吾れ其れ被髪左衽せん矣」と。「被髪」とは、頭髪をざんばらにすること。「左衽」とは、襟を左まえにすること。いずれも野蛮な異民族の風俗。夷狄の奴隷になることを謂う。

（12）謝霊運によるこの門生殺害事件については、『宋書』王弘伝に詳しい。これによれば、謝霊運の力人（護衛）の桂興という男性が、霊運の嬖妾に淫したことに因る。高木正一『六朝唐詩論考』（東京、創文社刊、一九九九年）四一五頁を参照。

（13）「微管」は、春秋時代の斉の桓公の名宰相管仲を指す。注（11）を参照。勲功の顕著な大臣に譬える。

（14）「汾陽」は、汾水の北。隠者の居処を謂う。『荘子』逍遥遊篇に、「堯、天下の民を治め、海内の政を平らかにして、往いて四子を藐姑射の山に見、汾水の陽にて、窅然として其の天下を喪る」と。

（15）『易』繫辞伝（下）に、「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」と。

［附記］本稿は、二〇〇二年九月二十一日（土）、九州大学中国文学会主催の中国文芸座談会第二〇〇回記念大会における記念講演、および同年九月二十八日（土）、北海道大学大学院文学研究科主催の学術講演での講演草稿を補訂したものである。